

特別賞 三省堂書店賞

『殺人犯はそこにいる ～隠蔽された北関東連続幼女誘拐殺人事件～』 清水 潔著

文学部 文学科 1 年 梅澤 歩

まるで推理小説のようだった。推理小説であって欲しかった。だが悲しいことにこれはノンフィクションである。紛れもない現実である。本書にはあまりにも理不尽な「事実」が綴られていた。

数十年前、栃木県足利市と群馬県太田市をまたいで 5 人の少女が誘拐・殺害された。犯行現場は半径 10 キロという狭い範囲内、すなわち同一犯による連続事件の可能性が高い。だが犯人は未だに逮捕されていないという。しかもこの五つの事件のうち「足利事件」だけは犯人が逮捕され「解決済み」になっていたのだ。一体何故…？ 微量な違和感を頼りに本書の著者、清水潔記者が真相を暴くため膨大な取材を開始する。

結論から言えばこの「足利事件」は冤罪事件であった。犯人として逮捕されていた菅家利和さんは 17 年もの間刑務所に閉じ込められ、自由を奪われていたのだ。取材によって明かされる、取り調べとは名ばかりのまるで拷問のような行為の数々。正義とは程遠い理不尽な仕打ち。あまりの残酷さに思わず目を覆いたくなる。しかし清水記者の粘り強い取材の甲斐あって菅家さんは釈放されることとなった。

だがここで問題が生じる。真犯人が未だに逮捕されていないのだ。事件から数十年経った今でも真犯人が野放し状態である。犯人が見つからないからではない。実は警察はもう既に真犯人の正体を突き止めている。では何故警察は真犯人を逮捕しようとししないのか？ その疑問を解消すべく本書を読み進めていくと、あまりに恐ろしい事実突き当たる。こんなことがあっていいのか。これが事実だとしたらとんでもないことである。ここではあえてその詳細には触れない。真実はその目で確かめて欲しい。

本書で明らかになる警察機関・司法機関の闇の数々は今まで決して報道されることはなかった。もし書店で、図書館で、この本の横を通り過ぎてしまっていたら絶対に知り得なかった情報ばかりである。正義とは何か。我々が今まで信じてきた正義とは何だったのか。やり場のない怒りや悔しさ、失望に胸が疼く。清水記者は報道機関の人々の中でも彼なりの「正義」を見失わなかった。菅家さんの冤罪を強く訴え、その努力は実を結んだ。そして根気強く取材を続け、ついには真犯人の特定にまで至った。だがそんな清水記者でも真犯人逮捕に至ることは出来なかった。どんなに「正義」を貫いても、強大な国家権力に打ち勝つことは出来なかったのだ。その悔しさは計り知れない。本書には著者の取材の詳細と事件の経過が述べられているが、最終章には著者の、真犯人に対する強い怒りの言葉が綴られていた。その言葉は重く、悲しく、胸に響く。

被害に遭った 5 人の少女たちは 10 歳にも満たないうちに殺されてしまった。もっと生きたかっただろう。もっと遊びたかっただろう。真犯人は今もこの世界のどこかでうのうと生きている。死刑相当の殺人を犯しておきながら、今もなお知らぬ顔で生きている。それがどうしても許せない。